

# ニュージーランドにおける二文化主義

## ー博物館と児童文学を通してー

秋山真弓子（経済学部学3年）

指導教員：柏崎千佳子

ニュージーランドを訪れると、先住民族マオリの文化に触れる機会が多くある。この背景にはニュージーランドが掲げる二文化主義（biculturalism）政策がある。二民族一国家を意味するこの政策は、「マオリ」と「パケハ」の二つの民族の対等な関係を表している。マオリはニュージーランドの先住民族であり、パケハはニュージーランドに住むヨーロッパ系の人々を指す。この政策はニュージーランド独自の姿勢で、多文化主義を掲げる他国に比べて先住民族の存在が大きな印象を受ける。本研究の目的は、この様に政策的に二文化主義が採用されているニュージーランドにおいて、社会生活にも二文化主義が体现されているのか考察することである。

社会生活においては、とりわけ幼少期の経験がその後の価値観に強く影響すると考える。そこで、具体的な分析の対象として国立博物館と児童文学を取り上げる。この二つを選んだ理由は、国立博物館は政府の政策的影響を受けやすい一方で、児童文学はどちらかというと自生的に潮流が生まれるものであり、違いが見られると考えたからである。この二つの比較に加えて、さらに社会経済面における二文化主義の様子とも対比させることとする。また、資料としてはニュージーランド政府、国立博物館、国会図書館のウェブサイトや地域研究等でニュージーランドについて扱った文献を用いる。

分析から得られたことが四点ある。第一に、批判は残りつつも政策的に二文化主義が実現されているという点である。ニュージーランド植民地化の契機となったワイタング条約の再評価を経て、1980年代以降には教育や言語政策を通して二文化主義が本格化していく様子が確認できる。第二に、社会経済的には二文化主義が体现されていないという点である。マオリとパケハの就労状況や保有資産において、明らかな格差が見て取れる。第三に、一部からは批判が生じているものの、政策的

影響を受けやすい国立博物館では二文化主義が徹底されているという点である。開館当初から二文化主義を経営理念に掲げており、展示や教育機会の提供を通してニュージーランド社会へ二文化主義を発信する大きな役割を担っている。そして第四に、児童文学に関してはマオリ関連作品の受容側では解釈の違いから論争につながる場合がありつつも、制作・評価においては二文化主義的な傾向が見られるという点である。二文化主義展開の潮流に乗りマオリ関連作品の制作が盛んになったり、マオリに特化した児童文学賞が創設されたりした。

以上四点から、本稿ではニュージーランドにおける二文化主義は社会文化的には体现されている一方で、経済的には不十分であると結論付ける。この文化面と経済面の差には二つの背景があると考えられる。一つは、経済的な二文化主義が実現すると、マオリがパケハにとって資源競合的な存在になるという点である。もう一つは、政府が公式にマオリーパケハ間の経済的な平等を掲げていないという点である。この二つの要因によって、ニュージーランドにおいて社会経済的な二文化主義は成立していないと考える。

ただし本論文では、現地調査をしていない点や、考察に間接的なデータしか用いていないといった点に課題があり、ニュージーランドにおける二文化主義を評価する上では限界がある。今後は、マオリに関する政策に対してのパケハ側の態度をより詳細に探る必要があるだろう。